

日常診療に活かす老年病ガイドブック 第4巻「認知症・うつ・睡眠障害の診療の実際」正誤表

日常診療に活かす老年病ガイドブック 第4巻「認知症・うつ・睡眠障害の診療の実際」（2005年4月1日 第1版第1刷）91ページにおきまして、各行の先頭文字が読みづらい印刷となってしまいました。ここに深くお詫びいたし、訂正申し上げます。

（2005年5月20日 メジカルビュー社編集部）

施設回想療法

メモリーボックス、メモリーキットを作成し、さらに施設で懐かしいコーナーを設け、そこに身をおくことで安心できる環境を提供することができる。

イギリスでは施設全体を回想療法でケアを提供している施設がある。そこでは回想療法マネジャーを置き、日々の活動の基盤を回想療法においている。入所者は落ち着いた環境の中で、生活にねざした回想療法をうけているといえる。今後は介護施設のコーナーなどを利用して環境そのものを高齢者になじみのある環境を提供することで施設回想療法を展開する予定である。

マルチメディア回想療法

今後の展開として私たちはパソコンとコンピューターネットワークを通じて簡単に古い物や写真、古い物語、日本人としての共通の懐かしい音楽や懐かしい思い出を簡単にアクセスできるシステムを開発している。これは無尽蔵に資料を蓄積可能であるし、日本中からアクセスも可能である。こうしたツールを利用して、回想療法をさらに展開する計画である。現在、沖縄県宜野湾市で博物館が沖縄のお年寄りの回想を発信する計画がある。

音楽回想療法

音楽療法との関係についても言及しておく必要がある。音楽回想療法といってもよい。古い歌、懐かしい歌というも実は回想療法の要素がもともとは入っている。音楽という誰にでも受け入れやすいツールにより、歌うことでまずは楽しく、そして仲間や介護者と時代を共有することができる。音楽療法も回想療法も共通するものがあることはいうまでもない。

回想療法のこれからの行方

回想療法はもともと当然、古くて新しい試みである。その効果は人により異なる。人によっては昔を思い出したくない方もいる。それはあくまでも選択として、可能な限り、生涯にわたり、健やかで長生きを実現するための工夫が必要である。その取り組みの1つが回想療法であり、しっかりとした理論とデータに基づいた取り組みが今後も続ける必要がある。最後に回想療法により、懐かしく、思い出がよみがえることによる精神的な安定が図られることはいうまでもない。しかし、その後の生活にどう反映され、維持されるかが今後の課題であろう。しかし、普遍化と共通の効果を生み出すために必要な要素があるはずである。今後はこれがしっかり見出され、エビデンスを積み重ねることが重要である。なお回想療法の内容は常に時代や文化とともに変化するものであることは認識する必要がある。常に新しいものを追う必要はないが、内容については個人により異なるものもあれば共通のものもある。今後さらに回想療法が広がり、高齢者のQOLの向上に役立つことを期待する。

その他の非薬物療法

音楽療法についても、われわれは認知機能との関連で調査研究を開始している。限定的ではあるが、その有効性が示されている。芸術療法もまた、特徴があり、その有効性も痴呆ケア学会で報告されている。内容はさまざま

音楽療法
芸術療法